

# 育児関与による父親の発達 — アイデンティティ変容過程に着目して —

八幡 朝子・島谷 まき子

## Development of fathers resulting from involvement in child-rearing, focusing on the process of changing identity

Asako YAHATA and Makiko SHIMATANI

A model was developed of changes in the identity of fathers that result from their involvement in child-rearing. Especially, “the identity as an individual” and “the identity as a relationship” were focused. Interview data of five fathers with infants were qualitatively analyzed using the modified grounded theory approach. Results indicated that involvement in child-rearing led to “Development of the identity as a father.” Moreover, “Development of the identity as a father” resulted in “Continuing child-rearing according to beliefs” that had relevance. Furthermore, “Continuing child-rearing according to beliefs,” was the core of this model. Also, “Continuing child-rearing according to beliefs,” “Changes in fathers’ identity” and “Adjustment of fathers’ identity and self-identity” had a circular influence on each other, which resulted in the “Growth” of “Becoming a father,” and promoted the process of “Reestablishing Self-identity.”

*Key words* : *father's development* (父親の発達), *child-rearing involvement* (育児関与)  
*identity changing process* (アイデンティティ変容過程)  
*modified grounded theory approach* (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ)

### 問題と目的

#### 1. 父親研究の課題

これまでの親の発達に関する多くの研究(柏木・若松, 1994; 尾形・宮下, 2000; 新谷・村松・牧野, 1993ほか)では、育児関与と父親の発達との関連が認められている。育児に関与することは親としての意識を高めるだけでなく、柔軟性や視野の広がりなど父親の人格的発達にも寄与することが明らかになっている。ここで、父親の育児関与とは何をさすのだろうか。Hawkins, Bradford, Palkovitz, Christiansen, Day, and Call (2002)は、父親の育児関与とは、情動・認知、そして倫理的要素を含む複雑で多面的構成概念であり、直接的な関与だけではなく間接的な関与も含むものとしている。また、森下(2007)は、日本における父親の育児関与に関する研究(例えば木田, 1982;

尾形・宮下, 1999)で扱われてきた育児関与項目の内容(養護・しつけ・遊び・関心・育児方針の決定など)の各領域が、何を基準に設けられたのかについては不明であると指摘している。つまり、これまでの研究では育児関与が何をさすのかが明らかではない。また、これまでの親研究は父親に限らず、量的研究に偏重する傾向があると指摘されている(大日向, 2001; 氏家, 1996)。父親の育児を通しての経験そのものについては明らかにされていない(森下, 2012)こと、今後質的研究により、父親の育児観を明らかにする必要性がある(牧野・金泉・伊豆・佐光, 2011)ことも指摘されている。氏家・高濱(1994)による、親になるプロセスの個性的側面が見過ごされてしまっているという指摘は、父親研究においても当てはまる。父親が育児の中で何を体験し、どのように心理的に「父親」として変化していくのかという

過程について詳細な分析検討を行い、質的側面から捉える必要がある。

育児経験により、父親の対人関係の在り様が変わることも示されている。柏木・若松(1994)は、「親となる」ことによる発達因子として“他人の立場や気持ちをくみとるようになった”項目を含む「自己抑制」因子、“いろいろな人に支えられていると感じるようになった”項目を含む「運命・信仰・伝統の受容」因子などを見出している。つまり、親となることにより、他者の気持ちを想像し、他者に感謝する対人関係上の発達的变化が起きる。このような対人関係の変容は、育児経験を通じてどのような過程を経るのかについて、検討する必要がある。

親自身の被養育体験が自分の子どもに与える影響についても、主に愛着理論の中で吟味されてきた。人は養育者との関係の中で自己と他者の関係性についての一般的な表象(内的ワーキングモデル)を形成し、それを通して対人関係を予測・行動する(Bowlby, 1973)。親子の間には、親とその親に似た関係が形成され、愛着スタイルを規定する内的ワーキングモデルが再生産されるはずである。しかし、宮本・藤崎(2008)が指摘するように、大多数の現代の父親にとってはモデルとなる父親像がなく、新しい父親役割をどのように担えばよいのかわからず困難を感じていることも考えられる。一方、木田・大谷(1992)は、子どもは父親との間に強い心理的紐帯を結ぶことで、父親の中にある大人の積極モデル(職業人、家庭人、社会人としてのモデル)をしっかりと見出していると指摘している。父親が育児経験のなかで、どのように父親モデルを認知し、その修正と継承を行うかについて、検討する必要がある。

## 2. 父親のアイデンティティ

Erikson(1959 小此木訳 1973)は、「自我が特定の社会的現実の枠組みの中で定義されている自我 a defined ego へと発達しつつあるという確信」をアイデンティティ(自我同一性; ego identity)とした。育児に関与する父親は、生涯発達理論の中で成人期の段階にある。成人期は、「世代性(生殖性)」対「停滞」の対立を乗り越え、「世話」という人格的活力を得るというライフタスクをもつ。白井(2011)は、成人期は成人役割への移行

に伴ってアイデンティティが吟味されるものとし、杉村(2008)は、成人初期は青年期に形成したアイデンティティを実際の社会経験を通して調整する時期であり、中年期はそれまでのアイデンティティを再構成するものとしている。一方、成人期のアイデンティティ発達を捉える上で、「個としてのアイデンティティ」と「関係性としてのアイデンティティ」の2つが重要な柱である(岡本, 2007)。「個としてのアイデンティティ」は自分とは何者であるのか、自分は何になるのかという、積極的な自己実現の達成へ向かうアイデンティティである。「関係性としてのアイデンティティ」は、個別化が達成された後に獲得される自己と他者の関係性であり、自分はだれのために存在するのか、自分は他者の役に立つのかという、他者の成長・自己実現への援助に向かうアイデンティティである。成人期に成熟したアイデンティティを達成するためには、この2つのアイデンティティの達成とともに、両者のバランスも重要である(岡本, 2007)。したがって、成人期にある父親は、「個としてのアイデンティティ」と、育児により形成される関係性、つまり「父親アイデンティティ」の両者のアイデンティティをもつことが考えられる。父親が安定して発達するためには、父親と自己の2つのアイデンティティ間で、様々なバランス調整作業を必要とするとともに、そもそも自分とは何かという「自己アイデンティティ」についての全体的な再構築の作業を行っていく必要性が生じると考えられる。そこで、父親の育児関与によりどのような心理的变化が生じ、どのように父親アイデンティティ形成がなされ、自己アイデンティティ再構築が促されていくのか、詳細な検討を行う必要がある。

## 3. 研究意義と目的

本研究では、父親が、育児関与を通して、父親アイデンティティを新たに獲得し、自己のアイデンティティを調整し再構築する過程に着目し、その内容を具体的に検討し、変容過程モデルを生成することを目的とする。本研究から得られる父親の発達に関するモデルは、今後臨床的援助を必要とする父親および家族の理解のために、有用な基礎的資料となることが期待される。

## 方法

### 1. 面接調査

#### (1) 調査協力者

東京都内私立幼稚園に通う園児の父親で、面接調査協りに同意した5名 (Table 1)。

#### (2) 調査期間及び手続

実施期間は、2013年7月下旬～9月下旬。研究目的に沿ってリサーチクエスションを設定し、岩壁 (2010) を参考にインタビューガイドを作成し (Table 2)、個別に1時間～2時間程度の半構造化面接を実施した。メモとICレコーダーにより記録し録音データから逐語記録を作成し、分析対象データとした。なお、本研究における面接調査は、昭和女子大学心理学系倫理検討委員会 (2013-3号) で承認を得た。

### 2. 分析方法

育児関与による父親の変容過程モデルを生成するために、対象者一人一人の語りのコンテクストを重視して適切に分析を進められると判断したことから、木下 (2007) の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach, 以下、M-GTA) を採用した。M-GTAでは、概念間の関係をひとつずつ検討し、関係する他の概念を見出す作業を繰り返す。これらが結果図として図式化されることで現象の何らかの“うごき”を説明できる。分析に際しては、臨床心理学を専攻する大学院生1名、著者2名の3名で対象データについて検討を行った。

## 結果

### 1. 概念とカテゴリーの生成

最初の1名のデータについてオープン・コーディングを行い、分析ワークシートを立ち上げ

Table 1 調査協力者プロフィール

	年齢	職業	妻の職業	子どもの学年等
A	40	自営業以外	フルタイム勤務	年中、未就園
B	35	自営業	専業主婦	年少、未就園
C	42	自営業	専業主婦	小5、小2、年長
D	31	自営業以外	専業主婦	年少
E	44	自営業以外	専業主婦	年長

た。さらに残り4名のデータから共通すると推測される部分を順に抜き出し、分析ワークシートに書き加え (Table 3)、定義、概念名をより包括的に表現できるものへ修正を加えて最終的に29個の概念を生成した。概念間の関係からサブカテゴリーを検討し、さらに抽象度の高い9つのカテゴリーを生成した (Table 4)。カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは〈 〉、概念は《 》と表記する。

#### 【日常の関わり】

《日常の関わり》が1つだけでカテゴリーとして独立した。

#### 【育児中の感情体験】

このカテゴリーは、《子ども中心になる》《育児中のジレンマ》の概念から成る〈育児中心の生活になる〉と、《父親であるという実感》《父親としての責任感》の概念から成る〈父親アイデンティティの萌芽〉の2つのサブカテゴリーから構成された。

#### 【育児に伴う対人関係の変化】

このカテゴリーは、《妻の苦労を認識する》《妻との協働意識》《育児の役割分担》の概念から成る〈夫婦間での調整〉と、《家族単位になる》《育児の情報収集》の概念から成る〈友人との関わり方の変化〉と、《子持ちの他者事情に関心をもつ》《子育てに関する社会制度への不満》の概念から成る〈社会への関心の変化〉の3つのサブカテゴリーから構成された。

#### 【自分の育てられ方の吟味】

このカテゴリーは、《父親モデル認知》《自分の育てられ方への評価》の概念から成る〈親モデルとの対峙〉と、《親モデルとの対比》《自分なりの父親像》の概念から成る〈親モデルに対するスタンスを決める〉の2つのサブカテゴリーから構成された。この2つのサブカテゴリー間では、〈親モデルとの対峙〉から〈親モデルに対するスタンスを決める〉へ至る流れがみられた。

#### 【実親との関係の変化】

このカテゴリーは、《実親への感謝》《実親 (祖父母) と子ども (孫) の関係への気遣い》の2つの概念から構成された。過去の生育史に関わる性質をもつカテゴリーとして捉えられた。

#### 【信念を伴った育児の継続】

このカテゴリーは、《親としての思い》《自ら子

Table 2 インタビューガイド

リサーチ・クエスチョ	領域	知りたい事柄	具体的質問
1. 父親は、育児を経験することにより、どのような（実感を伴った）体験をしているか。それは、「父親アイデンティティ」形成過程に、どのように関わっているか。	育児体験の内容	状況・内容・感情	「日常、どのようにお子様と関わりますか。」「また、関わりの中ではどのような気持ちを感じておられますか。」
	父親アイデンティティの存在	「父親」という認識が存在した時期 育児体験からの影響	「ご自身が父親であることを最初に認識されたのはいつ頃、どのような時だったでしょうか」「どのように感じましたか」 「お子様が誕生し、実際に子育てに関わるようになり、それまでの父親であるという認識に、何か変化はありましたか」「(あったとすると) どのように変化しましたか。」
2. 育児体験とその他の対人関係との間には、どのような相互作用があるか。それは、「父親アイデンティティ」に、どのような影響を与えるか。	育児⇒対人関係への影響	夫婦関係の変化	「育児に関わることで、奥様との関係は何か変化があったと思いますか」
		親子関係の変化	「育児に関わることで、ご自身の親御さんとの関係は何か変化があったと思いますか」
		職場関係の変化	「育児に関わることで、職場など社会での対人関係は何か変化があったと思いますか」
	対人関係⇒育児への影響	友人関係の変化	「育児に関わることで、友人との関係は何か変化があったと思いますか」
		夫婦関係からの影響	「奥様との関係が変化したことから、育児には何か影響があったと思いますか」「何かお感じになられたことはありましたか」
		親子関係からの影響	「ご自身の親御さんとの関係が変化したことから、育児には何か影響があったと思いますか」「何かお感じになられたことはありましたか」
		職場関係からの影響	「職場での対人関係が変化したことから、育児には何か影響があったと思いますか」「何かお感じになられたことはありましたか」
友人関係からの影響	「友人との関係が変化したことから、育児には何か影響があったと思いますか」「何かお感じになられたことはありましたか」		
対人関係・育児の相互作用⇒父親アイデンティティへの影響	父親としての意識が変化したかどうか	「対人関係のようなご自身の周りの状況や、育児が変化していく中で、ご自身の父親としての意識は変化していると思いますか。どのように変化していると思いますか。」	
3. 育児体験と父親モデル認知との間には、どのような相互作用があるか。それは、「父親アイデンティティ」にどのような影響を与えるか。	実父モデル認知	子ども時代に見ていた父親の姿	「あなたのお父様はどのようなお父様でしたか」 「お父様との関わりで、お父様の特徴がよくわかるようなエピソードがありましたら、教えてください。」 「お父様との関わりの中ではどのようなことを感じていましたか。」
	実父以外のモデルの存在	モデル認知の内容	「お父様以外に、参考になさっている父親像はありますか。どのような父親像ですか。」
		モデルに対する印象	「なりたいた父親像はありますか」「なりたくない父親像はありますか。」 「お父様との違い・似ているところはありますか。」
	モデル認知⇒育児への影響	モデルから影響を受けていると感じ、育児に実行したこと	「ご自身の育児には、理想の父親像から影響を受けていると思われる要素はありますか」「どんな要素ですか」 「こうなりたくないと思った父親像から、ご自身の育児に影響があると思われる要素はありますか」
	育児⇒モデル認知への影響	育児をしたことで、モデル認知が修正、又は強化されたこと	「育児を体験したことで、理想や反面教師としていた父親像の捉え方が変わったことはありますか」
	父親アイデンティティへの影響	新たに父親意識に変化を与えたか	(上記までの会話の内容を踏まえて)「そういった変化によって、『父親である自分』にはどんな影響があると思いますか」
4. 「父親アイデンティティ」形成に伴い、これまでの「自己アイデンティティ」との間で、どのような調整を図り、「新たな自己アイデンティティ」をどのように再構築しているか。	父親アイデンティティ形成による影響	自己の中の父親アイデンティティの領域の変化	「育児前のご自身の中での『父親』の部分は数字で表すと何割くらいでしょうか」 「育児後のご自身の中での『父親』の部分は数字で表すと何割くらいでしょうか」
		父親アイデンティティの存在	「では、今、ご自身はどのような父親であると思われますか」
	自己アイデンティティ変容過程	自己全体の(人格的)変化	「父親となったことで、ご自身の性格が何か変わっていくような気持ちを感じたりしていらっしゃいますか。」 「変わったとすれば、どのようなことですか。どのような状況でどのように感じますか(感じましたか)。」「そういった中で、何か迷われたり、葛藤されたりといったご経験があったのでしょうか(協力者から話が出れば役割葛藤、性役割分業観などの価値観等についてお伺いしていく)」
		自己アイデンティティ調整	「その時はどうされたのでしょうか(話の流れで臨機応変に)」「その後どうなったのでしょうか」
5. 「父親アイデンティティ」形成前の「自己アイデンティティ」と、「父親アイデンティティ」形成後の「自己アイデンティティ」にはどのような違いがあるか。	育児前後の自己アイデンティティの違い	自覚レベルでの違い	「育児前は、どのような人だったと思いますか」 「現在、父親となつて、先ほどお話くださった父親としてのご自身を含めて、全体として、ご自身をどのような人だと思えますか」
		他者から見た違い	「育児前は、どのような人だったと言われますか」 「現在、他の人から、父親であるあなたご自身を含めて、どのような人になったと言われることはありますか、変わったと言われることはありますか。」

Table 3 分析ワークシート例

概念名	育児の役割分担
定義	子どもに対する母親の関わり方と自分の関わり方を考え、自分に出来る役割を見つけ出し、遂行していこうとする
ヴァリエーション (具体例)	<p>(A氏) 嫁に送り迎えをお願いすることもあるんですが、そうじゃない時っていうのは、基本僕送り迎えしてるんですね。</p> <p>(B氏) まあ、お互いの役割分担でやったりとか、まあ、補てんし合いながらやってる感じですかねえ。僕、食事はほとんど作らないんですけど、それ以外でできること、家内がまあ育児してるとか、幼稚園の送り迎えしてる間は、僕ができることをするとか、役割分担が、よりなんか、積極的になったというか。</p> <p>(C氏) 一人目の時はけっこう、基本は妻任せで。こっちは休みの時に遊ぶ相手？なり仕事の一息ついた時は相手するよっていう世界だったのが、二人目生まれる時に、まあ結局入院する、して、そうすると一人目が取り残されるんで。基本ずっと見ていなきゃいけないですよ。そういう中で、やっぱり、二人いると二人とも妻が見るっていうのは、物理的に不可能な面もけっこうあると思うんで、そっからのほうが育児にちゃんと関わったとは思います。</p> <p>(D氏) 一応役割分担じゃないんですけど、まあ、母親はちょっと教育的に、こう、怒ったりとかするんで、私はなるべく怒らないように、えー、まあ、なるべく、いいよいいよっていう役割分担、しますね。</p>

どもに伝え教える》《子どもの性格理解を深める》の3つの概念から構成された。これは、【育児に伴う対人関係の変化】【自分の育てられ方の吟味】【実親との関係の変化】から影響を受けつつ、父親アイデンティティに影響を与え、さらには後述の【父親アイデンティティ変容】【父親アイデンティティと自己アイデンティティの調整】と相互循環的に影響を与え合い修正を繰り返しながら時間と共に進行するプロセス的要素を内包する、コア・カテゴリーであると考えられた。なお、M-GTAにおけるコアとは分析の中心を構成すると考えられるものである。本研究テーマであるアイデンティティ変容を推し進める過程は本カテゴリーを中心に展開すると捉えられた。

【父親アイデンティティ変容】

このカテゴリーは、《父親としての自覚の高まり》《父親としての態度の模索》の2つの概念から構成された。コア・カテゴリーである【信念を伴った育児の継続】から影響を受け、次第に拡大変化していくうごきをもつ特性がみられたため、2つを合わせ〈父親アイデンティティの拡大〉というサブカテゴリーとした。さらに、分析テーマに対する全体の論理的体系化の観点から、このサブカテゴリーの上位概念のカテゴリーを【父親アイデンティティ変容】とした。

【父親アイデンティティと自己アイデンティティの調整】

このカテゴリーは、《周囲に合わせた価値観調整》《妻と向き合う》の概念から成る〈外界との調整〉と、《父親役割に合わせた性格変化》《父親としての自己評価の安定》の概念から成る〈内的調整〉の2つのサブカテゴリーから構成された。2つのサブカテゴリーは相互に影響し合っている。

た。また、〈外界との調整〉は、【育児に伴う対人関係の変化】と相互的な影響がみられた。

【自己アイデンティティ再構築】

このカテゴリーは、《他者からの人格変化の指摘の受容》《自己全体の人格変化の自覚》の2つの概念から構成された。2つを合わせ〈アイデンティティの変化〉というテーマをふまえたサブカテゴリーを生成し、さらにこのことが分析全体において【自己アイデンティティ再構築】と位置付けられるものと解釈しカテゴリー化させた。

2. 現象特性と理論的飽和化

現象特性は、個々の具体的データを抜き取った後に研究対象を横断する純粋なうごきである。本分析過程における現象特性は、“どのように父親となっていくか”と捉えられた。モデル図全体が志向し到達しようとするうごきの本質は、父親になるというアイデンティティ変容への希求と変化であると捉えられたからである。

5名のヴァリエーションからは、結果図作成に至るまで修正を繰り返し、概念生成のレベルでは「小さな理論的飽和化」に至ったと判断した。変化、相互関係、影響、及び分析焦点者の個人的背景についても適合度を検討した結果、本研究の分析焦点者に限定された範囲内のモデルとしては、適応範囲内にある結果が得られ、「大きな理論的飽和化」に至ったと判断した。

3. 結果図とストーリーライン

育児関与による父親のアイデンティティ変容過程モデルを示す (Figure 1)。ストーリーラインは、以下のとおりである。子どもとの【日常の関わり】における【育児中の感情体験】の中から、

Table 4 生成された概念およびカテゴリー

カテゴリー	概念名	定義
【日常の関わり】	《日常の関わり》	日常の中での、実際の子どもとの関わり
【育児中の感情体験】	〈育児中心の生活になる〉	
	《子ども中心になる》	育児を体験する中で、自己中心的な行動よりも、子ども中心に感じ、考え、行動を選択するようになる
	《育児中のジレンマ》	育児体験の中で、なかなか思い通りにいかず、苛立ちを覚えたり、どうしたらよいかわからない経験をする
	〈父親アイデンティティの萌芽〉	
	《父親であるという実感》	子どもを目の前にし、又は、育児を体験する過程で、自分は「父親である」と実感すること
	《父親としての責任感》	自分が子どもを保護しなければいけない、育て上げなければならぬ、と自分の責任、立場を強く認識すること
【育児に伴う対人関係の変化】	〈夫婦間での調整〉	
	《妻の苦勞を認識する》	育児・仕事に携わる妻の苦勞を、認識すること
	《妻との協働意識》	妻に対し、子育てを共有し、子どもに対して共に向き合う同志として意識すること
	《育児の役割分担》	子どもに対する母親の関わり方と自分の関わり方を考え、自分に出来る役割を見つけ出し、遂行していくこと
	〈友人との関わり方の変化〉	
	《家族単位になる》	自分一人対他者との関係だけであった対人関係が、妻、子どもを含めた家族単位を中心とする付き合い方へと移行すること
	《育児の情報収集》	夫婦以外の広い対人関係から、育児に関する情報を集め、自分の子育てに反映させていくこと
	〈社会への関心の変化〉	
	《子持ちの他者事情に関心をもつ》	子どもとの関わりを経験することから、今まで思い馳せることの無かった、他者を取りまく環境や事情を理解しようとするようになること
	《子育てに関する社会制度への不満》	現在の子育てに関する社会制度の不足への不満、社会から自分に向けられる目に対する不満などを総合して、子育てがしづらい、と社会全体に対して不満を感じていること
【自分の育てられ方の吟味】	〈親モデルとの対峙〉	
	《父親モデル認知》	自分がこれまで見てきた、実父モデル、又は、それ以外の父親モデルを、良くも悪くも父親の参考例として心の中で認知していること。
	《自分の育てられ方への評価》	自分が実親にどう育てられてきたか、という意識。実父は自分から見てどんな親だったか、どのように自分に関わってきたか、という認識
	〈親モデルに対するスタンスを決める〉	
	《親モデルとの対比》	過去に抱いていた想像上の父親モデルが、実際の育児体験によって修正されること
	《自分なりの父親像》	心にある父親モデルとの類似・相違点を認識しながらも、自分は自分であり、自分のやり方でやればよい、と自分なりの父親像を築くこと
【実親との関係の変化】	《実親への感謝》	子育てを経験することによって、実親が自分を育てた時の気持ちや体験を、想像したり、理解するようになり、感謝の気持ちをもつこと
	《実親（祖父母）と子ども（孫）の関係への気遣い》	自分と実親との親子関係とは違う、実親（祖父母）と子ども（孫）との関係を認識し、間に立つ自分（親）の役割を取る
【信念を伴った育児の継続】	《親としての思い》	子どもにどのように育ててほしいか、という気持ち
	《自ら子どもに伝え教える》	自分の育てている子どもに対し、具体的に、親⇒子への行動・言語的な投げかけによって、ただの世話行動ではない、教育やしつけなどを行うこと
	《子どもの性格理解を深める》	自分の育てている子どもが、どのような性格をもつのかをじっくり観察し、情報収集も含めて客観的に分析し、自分なりに把握しようと考え続けること
【父親アイデンティティ変容】	〈父親アイデンティティの拡大〉	
	《父親としての自覚の高まり》	子どもと共に生活することを経験していくことによって、「自分は父親である」という自覚が高まっていくこと
	《父親としての態度の模索》	対人関係と育児の相互作用的な変化によって父親意識が成長するに伴い、新たな父親としての態度を模索し、見つけていくこと
【父親アイデンティティと自己アイデンティティの調整】	〈外界との調整〉	
	《周囲に合わせた価値観調整》	所帯をもったことでの葛藤、夫婦間の葛藤、子育てにおける葛藤を経験し、それまでもっていた自分の価値観が通らないことに直面するため、現状を打開すべく、自分や相手がどの方向に変わればよいのか考え、情報を集め、周囲の状況との価値観調整をはかろうとする
	《妻と向き合う》	子どもができたことにより、夫婦間における内容の深い相談や、細かいやりとりが必要となり、異なる考えについては調整をはかろうと努力しなければいけないこと
	〈内的調整〉	
	《父親役割に合わせた性格変化》	父親としての経験・時間を重ねる中で、求められる父親役割に合わせて、自己全体の性格も変化してくること
	《父親としての自己評価の安定》	数年の育児を経てきて、今の自分はこんな父親である、と自己評価でき、それが安定していること
【自己アイデンティティ再構築】	〈アイデンティティの変化〉	
	《他者からの人格変化の指摘の受容》	家庭、子どもをもったことで、他者に変化しと指摘され、認識すること
	《自己全体の人格変化の自覚》	育児前の自分に比べて、育児を経て、父親の要素を含め、全体として性格や人格が変わったと感じること

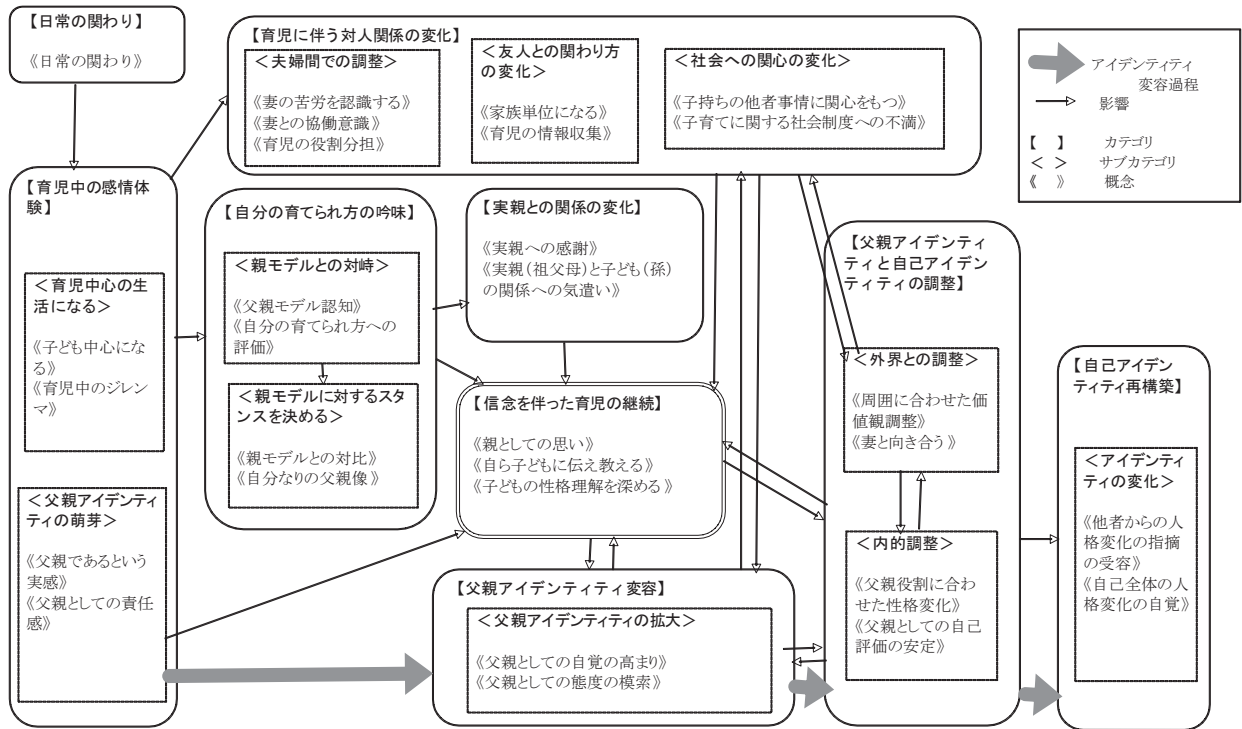


Figure 1 育児関与による父親のアイデンティティ変容過程モデル

次第に〈父親アイデンティティの萌芽〉が生まれ、そこから単純な世話行為ではない、質の深い【信念を伴った育児の継続】が生じていた。また【育児中の感情体験】から【育児に伴う対人関係の変化】がみられる一方で【自分の育てられ方の吟味】もなされ、【実親との関係の変化】が生じ【信念を伴った育児の継続】に影響を与えていた。この【信念を伴った育児の継続】が【父親アイデンティティ変容】を促し進める力となっていた。そして【父親アイデンティティ変容】が、【信念を伴った育児の継続】との相互作用、【育児に伴う対人関係の変化】との相互作用の中で進むと、育児前から存在していた自己アイデンティティと、父親アイデンティティ間の調整作業が行われていた。【父親アイデンティティと自己アイデンティティの調整】が行われるなかでは、【育児に伴う対人関係の変化】との相互作用、【信念を伴った育児の継続】との相互作用、さらに【父親アイデンティティ変容】との相互作用がみられた。これらの一連の動きの中では、特に独自のプロセス的要素をもつコア・カテゴリーであり父親の変容を推し進める力をもつ【信念を伴った育児の継続】と、【父親アイデンティティの変容】、

【父親アイデンティティと自己アイデンティティの調整】の3つのカテゴリー間で、相互循環的に影響を与え合う流れが生じ、これはたつきが「父親となっていく」「うごき」に強く影響を与えていた。このような中で【父親アイデンティティと自己アイデンティティの調整】が落ち着くと、【自己アイデンティティ再構築】に至る過程が示された。

## 考察

### 1. 父親アイデンティティの萌芽から自己全体の変容過程

育児体験中に〈父親アイデンティティの萌芽〉が生まれ、そこから質の深い【信念を伴った育児の継続】が生じ、これがコアとなって【父親アイデンティティ変容】や【父親アイデンティティと自己アイデンティティの調整】が進められることが明らかとなった。つまり、父親の育児は単なる世話行為の繰り返しではなく、関係性に基づく父親アイデンティティが新たに芽生えることによって、育児の質が信念を伴ったものへと変化していくと考えられる。

次に、【育児中の感情体験】を経て生じる様々な【育児に伴う対人関係の変化】と、【自分の育てられ方の吟味】を経た【実親との関係の変化】は、本モデルのコア・カテゴリーである【信念を伴った育児の継続】へと向かう一方向性の流れがみられた。これらの対人関係の変化は、父親の中で吸収され、【信念を伴った育児の継続】を通して、自分らしい育児スタイルが確立されていくと考えられる。さらに、【父親アイデンティティ変容】の段階に入ると、今度は【育児に伴う対人関係の変化】との相互作用が生じており、対人関係上の変化がさらに活発化すると考えられる。岡本(2007)は「関係性にもとづくアイデンティティの達成により、生活や人生のさまざまな局面に対応できる力、危機対応力、自我の柔軟性・しなやかさが獲得される」としている。関係性に基づくアイデンティティ形成の模索段階において、父親は、妻、友人、社会へと働きかけ、対人関係上の変化を感じながら、それらを取り込み、アイデンティティ変容を試みていると考えられる。そして、〈父親アイデンティティの萌芽〉から【自己アイデンティティ再構築】に至る全体のアイデンティティ変容過程の中では、【信念を伴った育児の継続】【父親アイデンティティ変容】【父親アイデンティティと自己アイデンティティの調整】の3つのカテゴリー間の相互循環的なはたらきがあり、それらが「父親となっていく」「うごき」を促していた。これらのうごきが何度も繰り返され蓄積されることによって、岡本(2007)のいう個と関係性の2つのアイデンティティの達成が次第になされ、【自己アイデンティティ再構築】に至ると考えられる。

## 2. 変容過程における個々の現象の意味

個々の語りから考えられる現象として、〈父親アイデンティティの萌芽〉につながる《父親である実感》は、子どもと近い距離で直接的な関わりを持っている瞬間に生起していた。

また、〈夫婦間の調整〉では、家族が増えたことで相互の意識・行動が変化し、各家族成員の役割が変化するという家族システムの変容がうかがわれた。《育児の役割分担》における協力者の語りは、自分のすべきことを探す、お互いを信頼してポジションをとりなおす、といったものが中

心であった。このことから、本研究の協力者が、伝統的性役割観にとらわれず、家事・育児に高く関わろうとする特徴をもっていることが推察される。父親モデルについては、他の対人関係(妻、友人、社会)とは性質を異にすることが示された。【自分の育てられ方の吟味】の中では自身の子ども時代からの《父親モデル認知》《自分の育てられ方の評価》を含めた〈親モデルとの対峙〉があり、その後自分と《親モデルとの対比》をし《自分なりの父親像》を築く〈親モデルに対するスタンスを決める〉過程がみられた。つまり、過去に見ていた父親モデルを土台にした上で、自分らしい父親スタンスを確立する材料として取捨選択することが明示されたと考えられる。これは、子どもが父親に見出す積極モデルの存在(木田・大谷, 1992)を支持するものと考えられる。さらに、【実親との関係の変化】は、祖父母、親(自分)、孫という三世代の中で展開される。《実親への感謝》は過去の関係性への決別でもあり、新たな《実親(祖父母)と子ども(孫)の関係への気遣い》を行う関係へと転換するために必要な過程であると推察される。

また、本モデルでは、【信念を伴った育児の継続】がコアカテゴリーとなっていることが示された。こうした育児行為は、ただの世話行為の繰り返しではなく、修正を繰り返しながら発展していくプロセス的性質をもっていた。ここで重要なのは、行為に信念が伴っているかどうかである。《親としての思い》は、子どもにこのようになってほしいという子どもの未来への期待と信念であり、《自ら子どもに伝え教える》原動力となる。《自ら子どもに伝え教える》ことは、親から子どもへ日常発せられ続ける、体当たりでストレートなメッセージであり、信念を伴った育児行為である。このような子どもとの関わりの中で《子どもの性格理解を深める》ことが進み、自分の分身ではない、個性をもった一人の人間としての子どもに向き合おうとする育児へと発展する。したがって、育児関与による父親の発達を検討するためには、観察可能な育児行為を量的に測定するだけでは不十分であり、育児関与にみられるこのような「信念」をはじめとするその人の個性を質的に捉えることが重要である。また、本モデルでは、【信念を伴った育児の継続】が相互に影響し合い



ながら【父親アイデンティティ変容】を進めていることも示された。【信念を伴った育児の継続】をするなかで《父親としての自覚の高まり》を感じ、《父親としての態度の模索》を行い、新たな父親としての姿を見つけていく〈父親アイデンティティの拡大〉がなされ、関係性としての【父親アイデンティティ変容】が生じると考えられる。さらに、【父親アイデンティティと自己アイデンティティの調整】では、変容する父親アイデンティティに合わせ、周囲とのバランスを取りながら自らの価値観に対する問い直しを行い、〈内的調整〉〈外界との調整〉の二つの整合性を図る作業が行われていた。《妻と向き合う》ことは《周囲に合わせた価値観調整》とは異なる大きな葛藤を伴っていた。育児を通して、互いの価値観や感じ方の違いが浮き彫りになり、容易には相手に合わせて妥協できない中で、それでも向き合わなければならない。こうして妻との関係が変化することで、より《妻との協働意識》が強まると推測される。そして【信念を伴った育児の継続】【父親アイデンティティ変容】【父親アイデンティティと自己アイデンティティの調整】の3者間での相互循環的な影響は、《父親役割に合わせた性格変化》と《父親としての自己評価の安定》がなされる〈内的調整〉が済むまで継続すると考えられる。これは次に繋がる【自己アイデンティティ再構築】と深く関連しており、《父親としての自己評価の安定》と前後して、【自己アイデンティティ再構築】に向かうと考えられる。アイデンティティの感覚とは、自分自身の内的な斉一性・連続性の自覚と、それが他者からも認められている確信のことである(杉村, 2008)。本研究でも《他者からの人格変化の指摘の受容》と《自己全体の人格変化の自覚》の2つによって〈アイデンティティの変化〉が生じ、【自己アイデンティティ再構築】がなされると考えられる。

### 3. 先行研究との比較

柏木・若松(1994)は「親となる」ことの因子として「生き甲斐・存在感」因子を抽出したが、本研究では、類似する概念として《父親としての責任感》が抽出され、無力な赤ちゃんに対する保護、一人前になるまで育てないといけない、といった子どもに対する保護責任、養育責任感が語

られていた。これは、伝統的性役割分業観に基づく男性としての責任というよりも、性差を超えた「親」としての感覚、つまり「育児性」(大日向, 2001)を伴う責任感として考えられる。

また、柏木・若松(1994)の知見からは、育児関与度が高いほど父親の発達が促されることが示唆されている。時間的制約のために育児関与量自体に限界があるとしても、もっと関わりたいという意識の高さは、育児関与量を自然に増加させるとともに、父親のアイデンティティ発達にも影響を及ぼすのではないかと考えられる。本研究の協力者の語りには、与えられた時間の中でできる限りの育児役割を獲得し、遂行していこうとする父親の意識が強く示されていたと推察される。つまり、単なる育児関与量だけが父親の発達を左右するのではなく、関わりたいという意識の高さとその後継続される育児の質が、父親アイデンティティ変容を促すと考えられる。

育児に関わりたいという意識の高さは、時間的制約のために思うように育児関与ができず、結果的に育児関与量の低い父親が経験する葛藤とも関係する。森下(2012)は、仕事と家庭間で生じる役割葛藤経験を経て自らの発達を実感するに至るまでのプロセスについて、検討する必要があることを指摘している。本研究協力者の語りからは、夫婦間の価値観調整、仕事と家庭の比重の変化、育児自体の理想と現実とのギャップを埋めるための価値観調整、一人で抱え込んで解決するという態度から他者に援助を求める態度への転換、など様々な観点から《周囲に合わせた価値観調整》、あるいは《妻と向き合う》事象が語られた。これらは葛藤経験として捉えることが可能であり、父親たちは葛藤を乗り越えるべく、様々な工夫を行い調整しながら現状に適応しようと模索していることが考えられる。

### 4. 今後の課題

父親の発達に影響を及ぼす育児の質、つまり行為に伴う信念などの心理的要素については、さらに詳細な検討がなされていくことが期待される。また、本研究の結果は、現場に戻され吟味され精緻化されていく必要がある。本結果が、一般の父親に対しどの程度有用であるのか、今後具体的に検討されていくことが期待される。

## 引用・参考文献

- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss, Vol.2. Separation*. New York : Basic Books.
- Erikson, E.H (1959). *Identity and the life cycle*. New York : International Universities Press.  
小此木啓吾 (訳) 1973 自我同一性 誠信書房.
- Hawkins, A.J., Bradford, K.P., Palkovitz, R., Christiansen, S.L., Day, R.D., & Call, V.R.A. (2002). The inventory of father involvement: A pilot study of a new measure of father involvement. *The Journal of Men's Studies*, 10, 183-196.
- 岩壁 茂 (2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究 方法とプロセス 岩崎学術出版社.
- 柏木恵子・若松素子 (1994). 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5 (1), 72-83.
- 木田淳子 (1982). 父親の育児参与と幼児の発達に関する調査研究：共働き家庭を対象に 滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学, 31, 79-97.
- 木田淳子・大谷直美 (1992). 父親の子育て参与に関する家族関係的考察 (第2報)：父子の心理的紐帯に及ぼす影響 日本家政学会誌, 43 (12), 1185 - 1194.
- 木下康仁 (2007). ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂.
- 牧野孝俊・金泉志保美・伊豆麻子・佐光恵子 (2011). 父親の育児に関する研究動向と今後の課題 小児保健研究, 70 (6), 780-789.
- 宮本知子・藤崎春代 (2008). 日本における乳幼児期の子どもをもつ父親研究の動向 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 11, 57-66.
- 森下葉子 (2007). 幼児期の子どもをもつ父親の育児関与に関する研究の現状と課題 学校教育学研究論集, 15, 15-28.
- 森下葉子 (2012). 仕事と家庭間で生じる役割間
- 葛藤と父親の発達との関連——共働き家庭の父親の場合—— 文京学院大学人間学部研究紀要, 13, 155-165.
- 尾形和男・宮下一博 (1999). 父親の協力的関わりと母親のストレス、子どもの社会性発達および父親の成長 家族心理学研究, 12, 87-102.
- 尾形和男・宮下一博 (2000) 父親と家族——夫婦関係に基づく妻の精神的ストレス、幼児の社会性の発達及び夫自身の成長発達—— 千葉大学教育学部研究紀要, 48, 教育科学編, 1-13.
- 岡本祐子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開 ミネルヴァ書房 pp36-39.
- 大日向雅美 (2001). 展望 母性研究の課題—心理学の研究は社会的要請にいかに応えるべきか— 教育心理学年報, 40, 146-156.
- 新谷由里子・村松幹子・牧野暢男 (1993). 親の変化とその規定因に関する一研究 家庭教育研究所紀要, 15, 129-140.
- 白井利明 (2011). 成人前期と中年期のアイデンティティ発達に関する研究課題 大阪教育大学紀要 第IV部門, 59 (2), 123-138.
- 杉村和美 (2008). アイデンティティ 日本児童研究所 (編) 児童心理学の進歩2008年版 金子書房 pp111-137.
- 氏家達夫 (1996). 親になるプロセス 金子書房.
- 氏家達夫・高濱裕子 (1994). 3人の母親：その適応過程についての追跡的研究 発達心理学研究, 5 (2), 123-136.

## 謝 辞

本研究にご理解、ご協力を賜りました幼稚園の先生方、特に調査実施にあたり多くの支援を提供して下さいました野上秀子先生、畠山範子先生に深く御礼申し上げます。最後に、お忙しい中本研究の面接調査に賛同し協力して下さいったお父様方に、心より感謝申し上げます。

やはた あさこ (昭和女子大学生生活心理研究所)  
しまたに まきこ (昭和女子大学大学院生活機構研究科)